

“Bartleby”における語り手のキリスト教的視点の揺らぎ

林 南乃加

1. はじめに

Moby-Dick (1851) および *Pierre* (1852) を発表した後、Herman Melville は短編小説 “Bartleby” を 1853 年に *Putnam's Monthly Magazine* に匿名で発表した。本作は、ニューヨークのウォール街の法律事務所での代書人として雇われたバートルビーが、突然、仕事を拒絶し、盲壁に向かって夢想到に耽るようになり、ついに浮浪者扱いされて刑務所に追いやられ、食事を拒否して餓死する物語である。この物語は弁護士の視点からバートルビーについて知り得た全てを語るべく、一人称の回想形式で語られる。

この物語の前半はバートルビーを取り巻く法律事務所の状況を含めた語りが中心であるが、後半は語り手の複雑な内面に比重が置かれている。その切りかわりを示す特徴的な場面として、バートルビーの実態が鮮明となる日曜日の事務所の場面ではトリニティ教会について言及され、また、後半の、語り手がバートルビーの処遇について思い悩む場面では、語り手は聖書、Jonathan Edwards や Joseph Priestley を紐解き、語り手とキリスト教との関係が明らかになる。

メルヴィルの宗教観を広範な視点から考察する William Braswell は、メルヴィルの初期作品には反キリスト教的な態度が表れているとし、その例として *Typee* や *Omoo*、*Moby-Dick* におけるメルヴィルの神の教義への反抗を指摘し、*Pierre* に至ってはキリストの倫理的な教えに即して生きる高潔な人間が自分自身と他者にもたらす災難を描くことでキリスト教への批判的な姿勢が露わになっていると論じている (75-76)。また、寺田建比古は『神の沈黙』において、メルヴィルには「欺く神」という、きわめて特徴的な、オプセッシヴな想念がある」とし、「欺く神」を、人間に対して「あたかも全的に応えるかの如くに絶妙に粧いつつ、しかも常に必ず終局にお

いては「幻覚を解いて」奈落の底へと突き落す、悪意にみちた、戯れる運命の神」と定義している（24）。これらの批評を踏まえると、“Bartleby”にもメルヴィルの神に対する懐疑的姿勢が潜んでいると類推されるのではないだろうか。

“Bartleby”についての古典的な批評としてはメルヴィルの作家としての葛藤を見出す Lewis Mumford の批評、本作をメルヴィルという「芸術家の寓話」とする Richard Chase の批評（81）がある。また、H. Bruce Franklin のようにバートルビーをキリストや神と同一視する見方や、Thomas Pribek のようにメルヴィルが描く弁護士像、語り手の思考や語りの意義などを分析する論考も見られる。出版当時の同時代的な観点から、バートルビーの生き方が Henry David Thoreau のウォールデン湖畔における独居生活を想起させるという見方もある。

では、本作における語り手のキリスト教的な態度や考え方は、語り手とバートルビーとの関係性やバートルビーの描出にどのように影響を及ぼしていると考えられるのだろうか。本稿ではこのような観点から、“Bartleby”における語り手に焦点を当て、そのキリスト教的要素が果たす役割について考察してみたい。

2. 語り手の人物像とバートルビー観

産業資本主義が深く浸透していた19世紀中葉のニューヨークのウォール街の法律事務所で弁護士を務める語り手の「私」は、公私にわたり多くの法律の代書人と接してきた経験豊富な人物である。バートルビーはこの語り手が遭遇した“a scrivener the strangest I ever saw or heard of”（17）であり、語り手がとりわけ読者に紹介したいと考えている興味深い人間である。

多くの批評家が分析しているように、語り手は理性と合理主義の象徴である弁護士であり、“the easiest way of life is the best”（17）と信じているように安楽を重視する人物である。彼は周囲の人々から“an eminently safe man”（18）と目されており、莫大な財を成した故ジョン・ジェイコブ・アスターからその“prudence”と“method”を評価され、衡平法裁判所主事を務めたことを誇りに思っている（18）。語り手は高い社会的地位と高い人

物的評価を得ており、その中で安住する人物であると言える。

物語の前半において、バートルビーの第一印象は“pallidly neat, pitifully respectable, incurably forlorn!” (24)であったが、落ち着いた物腰であるため、同僚であるせっかちなターキーやニッパーズに対する調整的役割も担えそうなことから、事務所内で専用の仕事用スペースが与えられる。バートルビーは当初、相当量の業務をこなしていたが、ある日、語り手が書類の照合をバートルビーに依頼すると、“I would prefer not to.” (25)と返答したため語り手は想定外の反応に驚きを隠せなかった。代書人に求められる作業の依頼に対するバートルビーの穏やかで毅然としたこの拒絶の言葉はやがて常態化し、語り手を当惑と怒りに陥れる。しかし語り手はすぐにバートルビーを解雇せず、次のように述べる。

His steadiness, his freedom from all dissipation, his incessant industry (except when he chose to throw himself into a standing revery behind his screen), his great stillness, his unalterableness of demeanor under all circumstances, made him a valuable acquisition. One prime thing was this,—*he was always there;*—first in the morning, continually through the day, and the last at night. I had a singular confidence in his honesty. I felt my most precious papers perfectly safe in his hands. (31)

あらゆる状況下におけるバートルビーの勤勉さ、穏やかさと静かな物腰は、語り手にとっては価値のあることである。バートルビーは不意に仕事を拒否することがあるものの、この段階では未だ語り手の信頼を失っていない。

このようなバートルビーの人物像は、Benjamin Franklin の *Autobiography* において列挙されているピューリタンとしての13の徳目、特に“Industry.”と“Tranquillity.” (83)を想起させる。福岡和子は、セルフメイド・マン型人間としてのフランクリンへのメルヴィルの批判的な考え方を指摘した上で、この語り手が亡きアスターから弁護士として高評価を得たことについて、語り手は「自分の力でアメリカ最大の金をわが物としたセルフメイド・マン的人物アスターを敬愛し、羨望の思いを寄せている」とし、すで

に十九世紀にセルフメイド・マン的人物像が「〈神話〉」化していた当時の「十九世紀中産階級の一つの姿」であったのではないかと論じている（157-58）。語り手がセルフメイド・マン型志向の典型的なアメリカ人像を理想として掲げているとすれば、語り手が自らの従業員であるバートルビーをそうした尺度から見て、バートルビーを少なくとも業務上、好都合な人間であると考えていることは十分に想定できる。このように語り手のバートルビーに対する評価の根底には、語り手自身の理想と符合する人物像、すなわちフランクリンが示したピューリタンとしての道徳性に基づくセルフメイド・マン型人物像を髣髴させる要素がうかがえる。

3. 語り手とキリスト教

語り手がバートルビーの本当の姿を知ったのは、トリニティ教会へ行く予定であった日曜日である。教会に予定よりも早く着いた語り手は、近くの自分の事務所内に入ろうとして鍵を回したところ、ドアを開かせまいとする力が内側から加わり、“the apparition of Bartleby”（32）に遭遇する。仰天した語り手はバートルビーの望み通り、事務所には入らず散歩に行くこととするが、その間、死人同然のバートルビーが脳裏から離れず、不安が増大する。やがて語り手は事務所に戻り、バートルビーの不在を確認し、彼の机の周りに毛布や石鹸、タオルなどを見つけ、職場のそのスペースがバートルビーの日々の生活空間となっていたことを理解する。この時のバートルビーの様相は、次のように、語り手に心理的影響を与えている。

His poverty is great; but his solitude, how horrible! Think of it. Of a Sunday, Wall-street is deserted as Petra; and every night of every day it is an emptiness. This building too, which of week-days hums with industry and life, at nightfall echoes with sheer vacancy, and all through Sunday is forlorn. And here Bartleby makes his home; sole spectator of a solitude which he has seen all populous——a sort of innocent and transformed Marius brooding among the ruins of Carthage! (33-34)

バートルビーの哀れな孤独を思うと、語り手は驚かざるを得ない。日曜日のウォール街が商業地区としての賑やかな様相から一転し、人影もなく、うち捨てられた石のように空虚な雰囲気にもまれる中で、事務所のある建物も同様に、平日は勤勉さと活気があるが、夜は虚ろで、週末は侘しい場所となる。語り手はバートルビーと自身を“sons of Adam” (34) であると考え、同じ人間としての悲しみや憂鬱さについて思いを馳せるが、バートルビーの孤独な姿が語り手の心から離れない。

この日曜日に語り手の想像力に訴えてきたのは、バートルビーが“dead-wall reveries of his” に耽る“the victim of innate and incurable disorder”であるという発想である。語り手はバートルビーの肉体は救ってあげられても魂は救えないと確信し、“I did not accomplish the purpose of going to Trinity Church that morning. Somehow, the things I had seen disqualified me for the time from church-going.”と述べる (35)。トリニティ教会へ行く当初の予定はおろか、その後、日曜日の教会通いの習慣も破られたのは、バートルビーの孤独の深淵を目の当たりにした結果、教会で神の教えに触れたとしても、バートルビーの絶望的な魂を理解し、彼を救済するための解決策は得られないことを予見したからではないだろうか。語り手のそのような判断は、バートルビーの個人的問題の枠を超えて、一般的なキリスト教批判に広がっていく。つまり、William Bysshe Stein が指摘するように、この語り手の教会通いの不履行は“the lawyer’s utter perversion of the basic principles of Christianity”を示すものであり、語り手にとっては、礼拝の慣習が社会的儀式へと墮落しているため、キリスト教を人間の哀れさや道徳的絶望という如何なる認識とも結びつけられるものではないのである (108)。バートルビーの孤独に衝撃を受ける語り手は、キリスト教の教義や制度に対する疑念を示す人物として、また、バートルビーはキリスト教への語り手の信頼を揺るがす契機となる人物として設定されていると言える。

物語の後半から終盤にかけ、バートルビーの処遇をめぐる語り手の苦悩が明確になる。トリニティ教会へ行くことが果たせなかった翌日、語り手はバートルビーに歩み寄るが返答はなく、その後もバートルビーは“his dead-wall reveries” (38) に耽り続ける。この時、語り手はバートルビーが視

力を減退させていることを知るが、バートルビーが写字の仕事を拒否すると、バートルビーを事務所に居座る“a fixture,” “a millstone,” “useless as a necklace” であると考え、“At length, necessities connected with my business tyrannized over all other considerations.” と感じ (39)、バートルビーに退去を命じる。語り手はバートルビーの怠業に対し、当初は寛大な態度を取っていたが、それが度重なるにつれて彼への信頼を失っていったのである。ここに至って、両者の業務上のつながりは終局的な段階を迎えるが、バートルビーはなおも退去することなく奥室に居座り続ける。

語り手はバートルビーに直接向き合うことをやめ、聖書に心の拠り所を見出し、次のように思索する。

But when this old Adam of resentment rose in me and tempted me concerning Bartleby, I grappled him and threw him. How? Why, simply by recalling the divine injunction: “A new commandment give I unto you, that ye love one another.” Yes, this it was that saved me. Aside from higher considerations, charity often operates as a vastly wise and prudent principle—a great safeguard to its possessor. Men have committed murder for jealousy’s sake, and anger’s sake, and hatred’s sake, and selfishness’ sake, and spiritual pride’s sake; but no man that ever I heard of, ever committed a diabolical murder for sweet charity’s sake. (43)

語り手の憤怒は、「聖なる掟」と称される聖書の一節、「私は新しい戒めをあなたがたに与える。互いに愛しあいなさい。」という文言によって和らげられる。語り手は、嫉妬や憎悪、利己心や慢心を凌駕する愛そのものに「賢明で慎重な原理原則」を見出し、愛のために愛を成す慈善こそが最も崇高な人間の行為であることに思いが至ったようである。こうして語り手は、バートルビーは自分の意志で事務所を退去する時が来るだろうと考え直すようになる。バートルビーが完全に自らのうちに閉じこもり、他者との接触を拒絶する一方、語り手は聖書の教えに即してバートルビーへの対応方法を決めようとしている。

この状態は、語り手が“Edwards on the Will”や“Priestley on Necessity”を引き合いに出す態度にも見て取れる。語り手はこれらの著作によって“a salutary feeling”を喚起され、バートルビーについて次のように語る。

Gradually I slid into the persuasion that these troubles of mine touching the scrivener, had been all predestinated from eternity, and Bartleby was billeted upon me for some mysterious purpose of an all-wise Providence, which it was not for a mere mortal like me to fathom. Yes, Bartleby, stay there behind your screen, thought I; I shall persecute you no more; you are harmless and noiseless as any of these old chairs; in short, I never feel so private as when I know you are here. At last I see it, I feel it; I penetrate to the predestinated purpose of my life. I am content. Others may have loftier parts to enact; but my mission in this world, Bartleby, is to furnish you with office-room for such period as you may see fit to remain. (44)

バートルビーへの当惑や憤慨から解放されたかのように、語り手は、バートルビーに関する諸問題は「永遠に定められた運命」であり、「全知の神の不思議な思し召し」によるものであったと確信する。このようにカルヴァン派の考え方の一つである運命予定説に納得した語り手は、バートルビーに衝立の奥に好きなだけ居続けることを許す気持ちになり、安堵する。

ここで注目したいのは、事務所を訪問した同業者が、バートルビーを見て、語り手が“the strange creature” (45) を飼っているという奇怪な噂を広めた途端、語り手の“wise and blessed frame of mind” (44) が一変することである。語り手はそのときの心中を次のように述べる。

And as the idea came upon me of his possibly turning out a long-lived man, and keep occupying my chambers, and denying my authority; and perplexing my visitors; and scandalizing my professional reputation; and casting a general gloom over the premises; keeping soul and body together to the last upon his savings (for doubtless he spent but half a dime a day), and in the end per-

haps outlive me, and claim possession of my office by right of his perpetual occupancy: as all these dark anticipations crowded upon me more and more, and my friends continually intruded their relentless remarks upon the apparition in my room; a great change was wrought in me. I resolved to gather all my faculties together, and for ever rid me of this intolerable incubus. (45)

語り手は、バートルビーが居続けた場合、語り手の権威を否定し、訪問者を困らせ、語り手の評判を台無しにし、貯蓄に縋って長生きをし、「事務所を所有する権利」までも主張するのではないかと不安に駆られる。周囲の友人たちが絶えずこの「亡霊」について無慈悲な言葉を漏らすにつれて、語り手の心に変化が生じるのである。語り手は結局、「全身全霊で、この耐え難い怨霊を永遠に退散させる」ことを決意する。バートルビーのほうは弁護士の元を離れず事務所に留まることを望むが、語り手は厄介払いしたかった彼から自分を引き離すため、事務所の移転を決断するに至る。

語り手の心に起きたこの一連の変化は、語り手が何よりも「職業上の評判」が傷つくの恐れ、職業上の利益追求を優先させたことに要因がある。語り手は、一旦は慈愛の大切さに気づき、運命予定説に納得したものの、バートルビーの存在が自分の職業上の地位を脅かすのではないかという疑念に捉われた途端、変節するのである¹。

4. 語り手のキリスト教への信頼の崩壊

前章で見たように、語り手のキリスト教的態度は、バートルビーとの関係性において、二度、挫折していることがわかる。一度目は日曜日の場面で、語り手が、職場を住居とするバートルビーの孤独な姿に衝撃を受けたという心理的要因が作用し、教会通いが断念されたことである。二度目は、バートルビーに対する世間からの反応という社会的要因により、語り手が自身の「職業上の評判」を優先させたことで慈愛の気持ちや運命予定説の考え方が放棄されたことである。特に二度目で語り手がバートルビーの元を去ったことは、語り手とバートルビーとの関係性に決定的な亀裂をもたらしている。

この一連の過程で、語り手のキリスト教的な考え方は崩壊する。この後、語り手は、住居としていた事務所を退去しないバートルビーに職探しを提案するが、バートルビーは拒否するのみである。バートルビーが浮浪者扱いされ、刑務所で餓死するという悲劇を迎えるまで、語り手は可能な限りの温情を見せるが、それは語り手が自身の職業的地位や社会的評価を保持した上での対応であることは否めない。安河内英光が、この語り手について、いろいろとバートルビーに善意を施したとしても、彼の「常識と理性」の世界は全く動かない。むしろ語り手は同業者仲間の不平や注文に動かされ社会的評判に影響されて、バートルビーとの対応の仕方を決めている。」(91)と指摘するように、語り手は最後まで自身の常識的感覚、理性と合理主義的志向から逸脱することはない。バートルビーの死は、語り手がバートルビーを事務所に居続けさせることができなかつたことへの皮肉の顛末としても解釈できる。

バートルビーの死後、語り手はかつてバートルビーがワシントンの“the Dead Letter Office”で下級職員として勤務していたことを知る。“The Dead Letter Office”で仕事を担当していたという事実は、やがて訪れるバートルビー自身の悲惨な死を予示していたのだと読むことができる。

Ah Bartleby! Ah humanity! (54)

結末において、弁護士はバートルビーの生き方、考え方、生涯と最期を総括し、一人の人間の物語を締め括る。

5. おわりに

“Bartleby”を、以上のように語り手に焦点を当て、キリスト教の観点から検討した。本作においてキリスト教は、語り手とバートルビーの関係性の展開を追う上で重要な要素であるが、語り手のキリスト教的な考え方は結末に向けて失われていく様相が見て取れる。

弁護士である語り手は当初、バートルビーを、セルフメイド・マン型人間の特徴を想起させるピューリタンの職業観を備える人物として見てい

だが、日曜日の事務所でバートルビーが深い孤独に陥っている様相を見て衝撃を受け、教会通いを断念する。このとき、キリスト教に対する語り手の疑念が頭をもたげてきたと考えられる。さらに語り手はバートルビーの存在が悪い噂を引き起こすに及んで、バートルビーを擁護する慈愛の精神や運命予定説の考え方を放棄し、自らの「職業上の評判」や都合を優先させるに至る。このような一連の出来事を経て、語り手のキリスト教への信頼は崩壊していることが確認できる。バートルビーを巡り、語り手とキリスト教の関係性が揺らぐのは、メルヴィルのキリスト教に対する批判的な見方に起因するものであると言えるのではないだろうか。

注

- 1 語り手のキリスト教的人道主義者としての側面を論じる Thomas Dilworth は、語り手はバートルビーに対する自分の愛情の欠如に罪悪感を抱いており、物語の大部分はその“confession”なのであると論じている (56)。また、Pribek は、語り手が標榜する人生の「安泰」は、“his loyalty to conventional values and inability to act by his own moral principle”を示唆するものであるが、そうした語り手の態度は“crime against humanity”であると断じている (194)。

引用文献

- Braswell, William. *Melville's Religious Thought: An Essay in Interpretation*. Octagon, 1977.
- Chase, Richard. “A Parable of the Artist.” *Bartleby the Inscrutable: A Collection of Commentary on Herman Melville's Tale “Bartleby the Scrivener,”* edited by M. Thomas Inge, Archon, 1979. pp. 78-83.
- Dilworth, Thomas. “Narrator of ‘Bartleby’: The Christian-Humanist Acquaintance of John Jacob Aster.” *Papers on Language and Literature*, vol. 38, Issue 1, Winter 2002, pp. 49-75.
- Franklin, Benjamin. “The Autobiography of Benjamin Franklin.” *The Autobiography and Other Writings*. Penguin, 1986, pp. 1-171.
- Franklin, H. Bruce. *The Wake of the Gods: Melville's Mythology*. Stanford UP, 1963.
- Melville, Herman. “Bartleby, the Scrivener: A Story of Wall-Street.” *Billy Budd, Bartleby, and Other Stories*, introduction and notes by Peter Coviello, Penguin, 2016, pp. 17-54.
- Mumford, Lewis. “Melville's Miserable Year.” *Bartleby the Inscrutable: A Collection of Commentary on Herman Melville's Tale “Bartleby the Scrivener,”* edited by M. Thomas Inge, Archon, 1979. pp. 57-60.
- Pribek, Thomas. “The ‘Safe’ Man of Wall Street: Characterizing Melville's Lawyer.” *Studies in Short Fiction*, vol. 23, Issue 2, Spring 1986, pp. 191-195.

Stein, William Bysshe. "Bartleby: the Christian Conscience." *Bartleby the Scrivener*, edited by Howard P. Vincent, *Melville Annual 1965 (A Symposium)*, Kent State UP, 1966, pp. 104-112.

寺田建比古『神の沈黙——ハーマン・メルヴィルの本質と作品』沖積舎, 1982年。

福岡和子『変貌するテキスト——メルヴィルの小説』英宝社, 1995年。

安河内英光『アメリカ文学とバートルビー現象——メルヴィル, フォークナー, パース他』開文社出版, 2011年。